

短篇集モザイク

I

みちづれ

三浦哲郎



新潮社

集モザイク



みちづれ
三浦哲郎

新潮社

短篇集モザイクⅠ たんべんしゅう みちづれ 	著者 みうらてつお 三浦哲郎	発行 一九九一年二月二〇日	二刷 一九九一年三月二〇日	発行者 佐藤亮一	発行所 郵便番号一六二 東京都新宿区矢来町七十一番地	株式会社 新潮社	電話 業務〇三(3266)五一一一 編集〇三(3266)五四一一	振替 東京四一八〇八	印刷所 二光印刷株式会社 製本所 加藤製本株式会社	乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
---	--------------------------------------	----------------------	----------------------	-----------------	---------------------------------------	-----------------	---	-------------------	----------------------------------	--

価格はカバーに表示してあります。

目

次

く	マ	す	な	ト	う	の	ひ	め	と	み
せ		み	わ	ラ		の	が	ま	ん	ち
も	ヤ	か	ば	ン	そ	し	ん	い	か	づ
の			り	ク		り	・		つ	れ
							じゃ			
							らく			

117	105	93	81	71	61	51	41	29	17	7
-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	---

おさかり

ささき

*

ねぶくろ

はらみおんな

かきあげ

てんり

おさなご

こいづろ

*

に
き
び

129

139

149

161

173

185

197

209

221

オーリョ・デ・ボーイ

さんろく

ゆび

じねんじよ

あとがき

短篇集モザイクⅠ

みちづれ

み
ち
づ
れ

白菊、一本、二百六十円。少々高いような気もするが、これが最後だから、いつも通りに十本買って、花束だとわからぬように紙ですっぽり包んで貰う。

「これから墓参りかね？」

と駅前マーケットの花屋はいう。

強い津軽訛りが懐かしい。花を買っても、もはや誰も粋なたくらみだと思ってくれないのは情けないが、花屋の見当はあながち外れているわけでもないから、

「まあ、そんなところだ。」

「命日ならしやうがないけど、難儀なこつたね、こんな天気で。」

外は横殴りの雪である。店の前を囲んでいる透明なビニールシートが、通路を吹き抜ける風を孕んでぱりぱりと音を立てている。

毎年のように、この店にきて、おなじ花をおなじように包んで貰うのだが、花屋の方にはまるで憶えがないらしい。年にいちどの客では無理もないが、花をすっぽり包ませたの

も、ただ、あいにくの風雪から守るためだと思つてゐるようである。

一見、なんでもなさそうな紙筒になつた花と引き換えに、千円札を三枚渡すと、

「はい、どちらも菊が十本。おまけして、二千と五百円ずつ、いただきますね。」

と花屋は店の奥の暗がりへ声をかけた。

そのとき、彼は、奥の石油ストーブのそばに、自分のとそっくりな紙筒を小脇に抱えた先客がゐるのに、初めて気づいた。黄土色の外套を着た、品のいい顔立ちの小柄な老婦人で、黒いブーツに炎の色が映つていた。

女房からおつりを貰つて、花屋を出る。また、どうぞ、という声を背中であらう聞いたが、もう、くることもない。

次の連絡船は午後三時の出航で、まだ一時間ほど間があつた。街にはべつに用がないから、そのまま駅へ戻つて、待合室の隅の軽食スタンドで一と息入れる。雪に濡れた頬をぬぐい、冷えた齒に滲みるコーヒーをちびちびと飲む。靴のなかに雪水が染み込んだのか、爪先が痛い。手袋をはめていた手も、指先の方がかじかんでゐる。ふなべりの寒さが思いやられる。

北の玄関と呼ばれる駅の構内は、着ぶくれた人々で混雑してゐた。スタンドの彼の椅子からは、囲いのガラス越しに改札口の雑踏が見えた。この駅では、鉄道の客も船の客もおなじ改札口を出入りしている。列車が発着するプラットホームの一本がやけに長く伸びて

いて、その果てが連絡船の棧橋になっているからである。コーヒーカップのほとぼりで手を暖めながら、見るともなしに眺めていると、さつき花屋で一緒だった老婦人が、銀髪に焦茶色の帽子をのせて改札口を通るのが目に入った。小振りなバッグを一つ提げ、例の紙筒は片手で胸に抱えている。街へ用足しに出てきたついでに、亡夫へ手向ける花を買って帰るのだろうか、と彼は思い、帽子を目深^{まが}にしてとぼとぼと郊外の家路を辿る姿を想像した。

しばらくして、彼も途中下車した切符を見せて改札口を通った。切符は、東京から海峡のむこうの港町まで、一枚でとおしになっている。

棧橋への通路を兼ねている長いプラットホームは、屋根があるにも拘らず、すっかり雪道になっていた。わずかにコンクリートの地肌が覗いているのは、跨線橋の降り口のあたりと、売店や立ち食い蕎麦屋の前ばかりで、あとは、屋根裏の塗料のせい一面に薄く黄ばんで見える雪道である。そこを、海の方から雪が真横に吹き抜けている。

彼は、その雪道のなかほどまできてから、首をすくめて前をゆくまばらな人影のなかに意外な後姿を見つけて、おやと思った。てっきり各駅停車の列車に乗って近郊へ帰るものとばかり思っていたあの老婦人が、焦茶色の帽子を雪のくる方へ傾けてのろろと歩いている。ゆく手には、もはや連絡船の乗り場しかない。すると、おなじ船に乗るつもりなのだ、おなじ花の紙筒を抱えて——彼はそう思って、妙な気がした。

ここからあまり遠くない土地で育った彼は、雪道の歩き方を心得ている。危なっかしい足取りの人々を抜いて、ほどなく老婦人に追いついたが、なんとはなしに前へ出るのを躊躇ためどっているうちに、目の前の焦茶色が、不意に沈んだ。まるで何者かにいきなり両足を払われたかのような転び方で、あ、と思ったときには、もう、雪の上に寝そべる形に倒れていた。彼は思わず駆け寄った。

「大丈夫ですか。」

「びっくり……とうとう転んじやつたわ。」

老婦人は、思いのほか明るい、張りのある声でそういいながら身を起すと、肩越しに彼を仰いだが、ふと怪訝そうな顔つきになって、確かめるように彼が抱えている紙筒へ目を移した。

「手を貸しましょうか。」

「いえ、結構。ひとりで立てます。」

きつぱりとそういったが、すぐには立てなかった。ブーツのかかところが凍こてついた雪を蹴つては滑るばかりである。見かねて、手を伸ばすと、

「ほんとにお構いなく。放つといってください。」

老婦人はちよつと身をもがくようにした。すると、その肘が、彼の手のひらを突いた。ほんの一時のことだが、同情や手助けのたぐいは一切拒否しようという頑かたくなな意志を伝える

手応えがあつた。

彼は、ちいさな吐息を洩らすと、また歩き出した。

広い連絡船の待合室には、立ち食い蕎麦の出し汁の匂いが籠っていた。色とりどりの椅子席は相変らず閑散としていて、棧橋や港の見える窓際だけがわずかに賑わっていた。身軽な防寒服の男たちが十数人もずらりと並んで、手に手に重そうなカメラを構えている。背後から覗いてみると、着いたばかりの連絡船がタグボートに押されながら向きを変えるところで、窓の正面に船首がくるとシャッターの音が高まつた。

この連絡船の航路は、あと一と月足らずで廃止されることになっている。海峡の下をくぐり抜けるトンネルが完成したからである。廃止の日が迫るにつれて、名残りを惜しむ客たちで船も港も混雑するだろうと思ひ、いまのうちに乗り納めをしようと早目に出かけてきたのだが、意外にも、いつもと様子が違うのはこの窓際だけであつた。

彼は、その窓とは反対側の奥までいって、隅っここのいつもの椅子に、ボストンバッグと紙筒を下ろした。この隅っこには、かつて脚の長い、緑色の羅紗^{ラシヤ}張りが手許へゆるく傾いている書き物机が置いてあり、もう何十年も前の話だが、彼の肉親のひとりがそこでこの世に別れを告げる手紙を書いたのであつた。その肉親は、手紙を投函してから船に乗り、海峡のまんなかあたりで身を投げた。遺体は遂に揚がらなかった。

だから、彼は、この海峡こそ肉親の墓場だと思い、郷里を遠く離れて、時間と費用をどうにかやりくりできるようになってからは、命日の前後に、花を携えて墓参りに出かけてくるのを年中行事の一つにしていた。墓参りといっても、海峡のまんなかあたりで連絡船のふなべりから花を落し、肉親の霊としばらく対話を試みてから、海峡のむこうの港町に一泊して、翌朝の飛行機で引き返すだけだが、肝腎の連絡船がなくなるのでは、そんな自分だけのささやかならわしもこれが最後ということになる。

荷物を椅子に残して、やがて取り毀されることになるかもしれない待合室のなかをぶらぶら歩く。いつの間にか、胸に揃いの造花をつけた団体客が売店のまわりにひしめいている。隙間を探して覗いてみたが、記念に欲しくなるようなものが見当らないから、子供たちへの土産に、航行中の連絡船を空から写したテレフォンカードを三枚買って、人ごみを離れる。

入口を入ってすぐ左手にある婦人待合室の前を通ると、ドアを開け放した戸口から、床より一段高くなっている絨緞敷きの奥の太い角柱の蔭に、焦茶色の帽子を脱いだ老婦人がひとりぼつんと坐っているのが見えた。賑やかに談笑する車座のグループにまるくした背中を向けて、うつむき加減に、ひっそりと正坐している。

彼は、通り過ぎてから、ふと、誰かに似ていると思い、すぐに自分の死んだ母親を思い出した。顔や身なりは似ても似つかないが、やはり小柄だった母親も、生前、よく炉端に